

特 集

伝統芸能における新型コロナウイルス禍の影響
—調査研究とその課題—

前 原 恵 美

はじめに

令和2年は誰にとっても新型コロナなしに語れない1年になったと思うが、それは古典芸能も例外ではない。本稿は、今年度「伝統芸能における新型コロナウイルス禍¹⁾の影響」に関連して行った調査研究事業を振り返り、その課題について整理することを目的とする。

なお、本稿で「伝統芸能」という場合、特に断りがなければ「古典芸能を中心とした伝統芸能」を指すことにする。私の理解では、「伝統芸能」ということばは、「広義で用いられる場合」と「狭義で用いられる場合」が混在しているのが現状だ。すなわち、「狭義の伝統芸能」としては古典芸能を指すことが多いようだが、「広義の伝統芸能」として、一定程度の年数を経て継承されてきた民俗芸能と古典芸能を合わせて指す場合もある。一方で、古典芸能といいながら、場合によっては古典に限らず現代的な演目、あるいは他ジャンル（洋の東西を問わず）とセッションするような演目も見受けられる。したがって本稿では、「古典芸能の実演家が出演する芸能」という、やや広い枠組みで古典芸能をとらえることばとして「古典芸能を中心とした伝統芸能」＝「伝統芸能」を用いる。

1. 「伝統芸能における新型コロナウイルス禍の影響」の情報収集と発信

1-1 情報収集の経緯

令和2（2020）年2月26日、安倍晋三首相（当時）からスポーツ・文化イベント等の2週間の自粛要請が出されるや、翌日から伝統芸能の中止・延期情報が溢れ出した。これらの反応の早さは目を見張るものがあった。速やかな情報把握が必要だと感じていた私としては、この情報のスピードをどうやって捉えたらよいかと頭を抱えたことを覚えている。さらに3月25日、小池百合子東京都事による外出自粛要請を受けて、当研究所も翌3月26日より自宅待機の体制に入った。実際に自宅待機の状況になると、関連分野の雑誌、機関紙等の情報を自由に参照することもままならず、そもそも紙媒体の情報では経緯が追えない流動的な状況で、情報把握の方法はいよいよ限られた。

当初、情報収集に際して参考にしようとしていた報告書として（公）日本芸能実演家団体協議会の『芸能白書1997 数字にみる日本の芸能』²⁾ および『芸能白書1999 数字にみる日本の芸能』³⁾ がある。いずれも伝統演劇、現代演劇、邦楽、洋楽、舞踊、演芸、その他の芸能の諸ジャンルに関する幅

広い情報収集と分析を行なっているが、当時大学院生だった私自身、邦楽に関する公演状況、教授活動、メディアでの活動についての情報収集や分析に関わる機会を得た。その時の記憶が蘇っていたわけである。もっとも実際には、専門分野に照らし、マンパワーや予算を考え、情報のスピードを鑑みて、情報収集の対象と基本的な情報源を絞ることにした。対象は「伝統芸能」、基本的な情報源は紙媒体資料では追跡できないと考え、ウェブ上の情報を主体としたが、核となる公式ホームページ、公式Facebookを設定し、情報項目が埋められない場合、さらに公式ブログや公式ツイッター等も参照するようにした⁴⁾。

また、分析に耐え得る最低限の情報項目は保持しなければならず、一度情報収集を始めたならその項目は極力変更しないことが重要なので、前掲の（公）芸能実演家団体協議会による報告書のデータ項目を参考にしつつ、今回の情報収集の先に、無形文化財保護に資する情報を提供し、関係者の疑問や関心に応える分析結果の公表も視野に入れて、項目を設定した。東京文化財研究所のホームページ内からリンクを張っている「伝統芸能における新型コロナウイルス禍の影響」⁵⁾では、「関連事業の延期・中止情報」「再開関連情報」の概要をグラフや表で公表し、およそ月に一度更新している。

1-2 収集できない情報の顕在化

前掲の情報収集と分析に関しては、すでに二つの課題が明らかになっている。

第一に「稽古」である。その稽古へのコロナ禍の影響が、どうやっても見えてこないことを、念頭に入れておく必要がある。ちなみにここでいう「稽古」には二つある。まずは公演のための実演家どうしの稽古、いわゆるリハーサルに該当する稽古である。これは公演そのものが中止、延期される中で本来の意義が減じてしまっているが、プロの実演家としての技術の研鑽、維持の観点からも影響が少なくないと思われる。また、その後の実演家への聞き取り調査で浮かび上がってきたのが、公演だけでなくこうした稽古がモチベーション維持に与える影響であった。とりわけ、個人では成立しにくい芸態の芸能、例えば歌舞伎や日本舞踊（一人立ちの舞踊は可能かもしれないが、合わせる音楽は録音に限られる）、能、合奏を定型とする演奏に与える影響は無視できない。挙げてみれば一目瞭然だが、実は伝統芸能の多くが単独で成立しにくい、多かれ少なかれコミュニケーションを前提とした芸能とも言えるのだ。二つ目の「稽古」は、いわゆる愛好者に向けた稽古である。これは実演家にとって実演と並ぶ収入源でもあり、実は生活に直結する。コロナ禍で「リモート稽古」の工夫もあちこちでされているが、前掲のように一人ではそもそも成り立ちにくい芸能には、リモートによるタイムラグがハードルになる。例えば師匠と一緒に謡を謡う、師匠の三味線に合わせて演奏する、師匠について踊るといった稽古には困難が伴う。これをコロナとの共存を前提として馴れるべきと考えるか、本来の芸能の稽古とは少し違うものとして捉えるかは意見が分かれるところであろう。

二つ目の課題は、公演などの実演状況に関する情報は、何らかの情報源から拾うことができたとしても、芸能を支える保存技術にコロナ禍がどのような影響を与えているかまでは、把握できないという点である。芸能を支える保存技術には、楽器、装束や衣装、大小道具、鬘などにかかわる様々な製作・修理技術があり、実演の状況に照らせば影響が広がっていることは間違い無い。こういう技術への影響という視点での情報収集は、目的を明確にした上でアンケート調査を依頼するような形で行う

以外の方法では難しいと思われる。

ちなみに、文化庁は令和2（2020）年9月30日から10月13日まで、文化庁ホームページと文化庁公式LINE上で「文化芸術活動に携わる方々へのアンケート」を実施した。内容は、「新型コロナウイルス感染症拡大による芸術家等への影響について」、「芸術家等の活動の実態について」、「芸術家特有の実態からもたれされる環境変化、緊急事態に対し必要な施策について」で、対象者は「文学、音楽、演劇、舞踊、伝統芸能、大衆芸能、美術・写真・デザイン、美術、写真、メディア芸術、生活文化・国民娯楽などの分野の活動に関わる芸術家、実演家、教授・指導者、制作・技術スタッフ」とのことであった。その目的は「この機にこれまでしっかりと把握していなかった文化芸術の担い手である芸術家等の実態を捉え、『新たな生活様式』のもとでの芸術家等活動基盤を強化していくため」とされた。アンケート結果は文化庁のホームページ上で公開されている⁶⁾。もっともこのアンケートは対象が非常に幅広く、アンケート項目は全対象者共通で、2週間の期間内に文化庁のホームページまたはLINE上で回答する方式だった。そうした方式等を反映してか、回答数の65%強は20代、30代で、対して全体に占める伝統的な芸能の回答数は3%に過ぎなかった（さらに講談、落語、浪曲などの演芸が「伝統劇な芸能」ではなく「芸能」の括りに入っていて、「漫談」、「漫才」や「歌唱など」と一緒になっているのでわかりにくい）。まして伝統芸能を支える保存技術者については、おそらく「公演、展示、映画・映像等に係る専門分野（演出、監督、振付、デザイン、大道具、照明、音響、制作等）」に入っていると想像はしてみるものの、現状が浮かび上がってこない。目的にもよるが、アンケート調査の対象と項目、方式は難しい問題を内包していると感じる。

無形文化財の保存技術の調査研究の一環として、東京文化財研究所（以下、「当研究所」）にできることを考えれば、技術継承の観点からの聞き取り調査を行い、その情報を公開して関心を高めていくことであろう。現在継続中の「楽器を中心とした文化財保存技術の調査報告1・2・3・4」⁷⁾において、コロナ禍の影響という特異な状況も意識しながら調査を続けたい。

これらの諸課題を意識した上で、『無形文化財の保存・継承に関する調査研究プロジェクト報告書「伝統芸能における新型コロナウイルス禍の影響」』に、これまでの分析軸にいくつかの視点を加えた「伝統芸能における新型コロナウイルス禍の影響」データおよび解説を掲載した⁸⁾。

2. フォーラム1「伝統芸能と新型コロナウイルス」の開催

2-1 フォーラムのねらい

伝統芸能の一つの魅力は、その実演によって観客が非日常の世界に誘われ、その世界に没頭できる点にある。このことを考えると、多くの公演が中止・延期の状況にある中で、現実を直視して共有しようというこのフォーラムの試みには、「現実的過ぎる」、あるいは「時期尚早」という意見もあったかもしれない。その一方で、この時期だからこそ、実演家、企画・制作者、保存技術者が一つの現実を共有できる稀少な機会になり得るという考えも可能であろう。結局、後者の考えに立って、このフォーラムを企画、実行することになった。今にして思えば、このような企画は当研究所のような機関だからこそ実現可能だったのかもしれない。いずれにせよ、「実演家×企画・制作者×保存技術者」

という、実演への関わり方の異なる方々に一堂に会してもらうこと、「能楽×邦楽（三味線／箏）」という普段あまりクロスしない種目の方々に一堂に会してもらうこと、リモートを含めた事前収録であっても、関東と関西の関係者に一堂に会してもらうこと、これらを掛け合わせたフォーラムとして開催することにした。

これまでそれぞれの立場で、コロナ禍やそれ以前からの伝統芸能の需要低迷といった課題を感じてきたであろう登壇者の言葉は、伝統芸能が一斉に一時停止した状況を体感している時だからこそ、力のあるものになったのではないかと思っている。こうした意味では、企画の意図はあるていど通じたと感じる。

2-2 その先にあるもの

こうしたフォーラムに際して、個別の公演や報告の後に、座談会やシンポジウムとしてそれぞれの意見や感想を述べ合い、討論を行うことはよくある。今回も講演、話題提供、個別の事例報告のあとに座談会を設定したが、その際に登壇者の方々に事前にコメントをお願いしたことが2点ある。それは、「自分と同じジャンルでありながらことなる立場から関わる人」の事例報告へのコメントと、「自分と異なるジャンルに関わる人」の事例報告へのコメントである。各登壇者の方にはご負担をおかけしてしまったかもしれないが、同じくジャンルに関わる人どうし、あるいは異なるジャンルだけでも伝統芸能に関わるという点では共通する人どうしが、お互いの立場に歩み寄って共通点や相違点を確認する場となったことはありがたかった。

座談会の事前の打ち合わせでは、もう一つ申し合わせていたことがある。それは、座談会でそれぞれ上記についてコメントをしたあとに、伝統芸能とコロナ禍の現状理解の先に何が課題なのかをなるべく具体的に共有したい、そしてもし可能ならばその解決の糸口を見つけたい、というものであった。「情報共有」という言葉はこのような企画の際にしばしばキーワードになるが、できればその原因となる課題、さらに希望を見出すための糸口を目指せないかという提案である。申し訳ないことに、私自身に具体的な見通しがあったわけではないが、コロナ禍という前代未聞の強烈な影響下において、課題として「伝統芸能に関わる者の社会性」という言葉を共有できたことは非常に大きな収穫であった。実演家も、企画・制作者も、保存技術者も、共に外に向かって言うべきことを言う社会性、発信するための積極性への言及が一致し、ジャンルや立場を超えて伝統芸能に関わる人たちに共通する前向きな姿勢の現れと受け止めた。また、その社会性によって、窮状を訴えて共に支援を求めたり、将来に向けた需要の開拓のために積極的に踏み出す新たな一歩が見えたように思われた。

このフォーラムは、コロナ対策を講じるため出席がごく少人数に限られたので、記録映像を配信している（現在も暫定的に配信中）⁹⁾。当日、事前収録による映像での参加となった登壇者には、実は時間の都合で編集せざるを得なかった部分にも多くの示唆もあった。そこでフォーラムの報告書には、一部編集した部分を文字化して収め、刊行した¹⁰⁾。

3. その他の「伝統芸能における新型コロナウイルス禍の影響」に関する調査研究等

3-1 「新型コロナウイルスと無形文化遺産」のホームページおよびFacebookでの情報発信

いずれも東京文化財研究所のホームページ¹¹⁾ およびFacebook¹²⁾ からリンクを張っているページで、後者では支援情報、再開情報、新たな試み、関連情報などを比較的幅広く発信し、無形文化遺産部の研究員全員が投稿できる。そのうち支援情報を中心に、石村智音声映像記録研究室長がホームページに定期的な転載を行なっている。特にFacebookでは無形文化遺産全体（国内外を問わず）に関わる情報をアップしているが、どのような人がどのような話題に関心があるのかが見え易く、情報発信しながら情報収集している感がある。

3-2 その他の発信等

1. や2. の情報発信やフォーラム開催を通して、伝統芸能の現状への関心があるていど高まっていると感じる。私自身、その延長線上で、新聞各紙やテレビ局からの問い合わせや取材、原稿の依頼¹³⁾ を通じた発信の機会もあった。目に見える数字やグラフの提示で、曖昧模糊としたコロナ禍の影響を多少は明らかにできているのかもしれない。また、フォーラムで複数の視点からクロスオーバーする登壇者をお迎えし、それぞれに充実したご報告をいただいたことで、幅広い芸能分野の方々に関心を持ってもらえた一面もあるように思う。その一方で、数字のような見えやすいサインに影響され過ぎないことも重要だ。すでに述べたように、数字に現れないが確実に影響を受けている局面が存在する。数字はまさに氷山の一角で、その見えている一角のみがクローズアップされて、伝統芸能へのコロナ禍の影響の全体像と捉えられることには大きな懸念を覚える。数値が一人歩きしないよう、見えにくい部分への言及を怠らずに発信し続けることが重要だと考えている。

4. 今後を見据えて

現時点ではコロナ禍の行末が見えにくい状況が続いているが、情報収集の継続には多くのマンパワーや時間、予算が必要なことも事実である。こうした情報収集を今後どのように展開させていくべきかという点も、一考が必要であろう。一方で伝統芸能については、こうした公演状況の継続的な把握こそがセーフティネットの基本情報となるので、より広い視野で伝統芸能の「防災」を考える時、何から伝統芸能を守るのか、あるいは何をもって災いに遭ったとみなすのか、といったことを判断するためにも、これらのデータの整備が急がれるのではないかと感じている。

また、現状を互いに認識し、共通の課題やその先の展開について考える機会になったフォーラム1であるが、今後はグッド・プラクティスのような事例とその応用についての情報共有など、コロナ禍からの脱却に向けたヒントになるような調査研究やその公表の機会も提案できないか、検討していきたい。コロナ禍は伝統芸能をはじめ、無形文化遺産に未曾有の衝撃を与えたが、この地点に皆が同時に立ったからこそ見えることもあると信じたいと思う。

謝辞

「伝統芸能における新型コロナウイルス禍の影響」の情報収集・発信に関連して、以下の方々にご協力頂いている。以下に名前を記して深謝申し上げる（所属略、五十音順）。

金昭賢、曾村みずき、館野太朗、中川優子、中田翔子、橋本かおる、渡瀬綾乃

《注》

- 1) 以下、本稿では「新型コロナウイルス禍」を「コロナ禍」と記す。
- 2) 芸能文化情報センター・編、日本芸能実演家団体協議会・発行、丸善(株)出版事業部・発売、1997年
- 3) 芸能文化情報センター・編、日本芸能実演家団体協議会・発行、丸善(株)出版事業部・発売、1999年
- 4) 参照している基本的なホームページ（順不同）：（公）公立文化施設協会の正会員の各ホームページ、邦楽ジャーナル、（公）芸団協正会員の各ホームページ、国立劇場、国立演芸場、国立能楽堂、国立文楽劇場、国立劇場おきなわ、伝統芸能情報館、（公）能楽協会ホームページの能楽堂サーチ掲載の能楽堂、紀尾井ホール、（公）落語家芸術協会、（一社）落語協会、（一社）日本浪曲協会、（公）上方落語協会、（公）浪曲親友協会、（一社）日本演芸家連合、講談協会、東京かわら版、（一社）全国邦楽器組合連合会、東京邦楽器商工業協同組合、（株）松竹、そのほか実演家や団体の公式ホームページ ほか
参照している基本的なFacebook（順不同）：邦楽の友 ほか
参照している基本的なツイッター（順不同）：（一社）全国邦楽器組合連合会 ほか
参照している基本的なブログ（順不同）：らくごカフェ ほか
- 5) <https://www.tobunken.go.jp/ich/vscovid19/eikyou-20201225>参照。
- 6) 「『文化芸術活動に携わる方々へのアンケート』の調査結果について」（文化庁ホームページ https://www.bunka.go.jp/koho_hodo_oshirase/hodohappyo/92738101.html）参照。
- 7) 『無形文化遺産研究報告12・13・14・15号』所収（2018・2019・2020・2021年、東京文化財研究所）
- 8) 東京文化財研究所、2021年。
- 9) 「【シリーズ】無形文化遺産と新型コロナウイルス フォーラム1「伝統芸能と新型コロナウイルス」動画（東京文化財研究所 ホームページ <https://www.tobunken.go.jp/ich/vscovid19>）参照。
- 10) 「【シリーズ】無形文化遺産と新型コロナウイルス フォーラム1『伝統芸能と新型コロナウイルス』報告書」、2021年、東京文化財研究所。
- 11) <https://www.tobunken.go.jp/ich/vscovid19> 参照。
- 12) <https://www.facebook.com/groups/3078551232201858> 参照。
- 13) 「老舗三味線メーカー廃業の危機、音楽界への衝撃 コロナ禍の苦境、逆回転させる発想を」（朝日新聞デジタル ホームページ「論座」 <https://webronza.asahi.com/culture/articles/2020082400011.html>）参照。

Influence of Covid-19 on Traditional Performing Arts: Investigation and Issues

MAEHARA Megumi

The year 2020 has been one in which Covid-19 has been the topic of conversation for all. The field of classic performing arts has been no exception. In the present paper, investigation projects associated with “the influence of Covid-19 on traditional performing arts” are examined and related issues are organized. Information has been made public through websites and Facebook, and forums have been held in order to increase interest in the current condition of traditional performing arts. It has been possible to “make visual” the current situation, but it is also true that parts that are difficult to see are most greatly influenced. To continue interest in the movement of “the present condition that is visual” while observing and verifying “facts that are difficult to see” in the ever-changing and sensitive condition that surrounds traditional performing arts may be an important issue.